

日本甲虫学会 第13回大会
日本昆虫分類学会 第26回大会

大会プログラム・講演要旨集

The 13th Annual Meeting of the Coleopterological Society of Japan
The 26th Annual Meeting of the Japanese Society of Systematic Entomology
Program and Abstract



於 愛媛大学農学部

2023年12月2-3日

プログラム

1日目：12月2日（土）

受付開始	9:30～
評議員会（大講義室）	10:00～12:00
総会（大講義室）	13:00～14:00
学会賞授与式・受賞講演（大講義室）	14:00～15:00
分科会（各教室）	15:00～17:00

2日目：12月3日（日）

同定会（教室），ポスター発表コアタイム	9:00～10:30
研究発表（口頭）（31・32教室）	10:30～12:00
公開シンポジウム（大講義室）	13:00～14:30
研究発表（口頭）（教室）	14:45～15:45

	12/2 AM		12/2 PM		12/3 AM		12/3 PM		
	評議会		総会・講演	分科会	同定会	発表	公開シンポ	発表	
	9:00～12:00		13:00～15:00	15:00～17:00	9:00～10:30	10:30～12:00	13:00～14:30	14:45～15:45	
大講義室	○		○	分科会1			シンポ		
11教室	休憩スペース（ポスター発表会場）								
学生ラウンジ	本部								
21教室	休憩スペース			分科会2	休憩スペース				
22教室				分科会3	同定会1				
23教室				分科会4	同定会2				
31教室				分科会5		口頭発表1		口頭発表3	
32教室				分科会6		口頭発表2		口頭発表4	

会 場
愛媛大学農学部樽味キャンパス
(松山市樽味 3-5-7)



※松山市内から上記のとおり、伊予鉄バス8番線（東野経由、道後温泉行）で15分程度です。タクシーでも1メートルほどです。

※樽味キャンパス正門から入って、右側にある大講義室と農学部2号館（講義棟）の1～3階が会場です。他の研究棟には入れないのでご注意ください。

※愛媛大学の昆虫コレクションは他キャンパスにあるミュージアムで保管されております。今回は事前に連絡いただいた方のみ調査できます。（ミュージアムは土曜日については一般開館していますが、日曜日は閉館日です）

※昼食はご持参いただくことをお勧めします。最寄りのコンビニまでは歩いて10分ほどかかります（地図参照）。休憩室で飲食可能です。

※懇親会は開催しません。小集会単位などで懇親会をされる際は、街中に出るか道後温泉方面をお勧めします。

※両日とも講義棟は18時に閉めます。

新しい情報などは学会 Twitter（新 X）をご覧ください。



第 1 日目 12 月 2 日 (土)

評議員会 (大講義室)

総会 (大講義室)

学会賞授与式・受賞講演 (大講義室)

2023 年度論文賞

受賞論文 : WAKI, Y., Y. YAMAMOTO & K. MATSUMURA. Habitat Characteristics of Coast Environments and Leg Morphology in the Flightless Supralittoral Weevil *Isonycholips gotoi* (Coleoptera, Curculionidae). *Elytra*, New Series 13 (1)

功劳賞 : 該当者なし

奨励賞 : 千田喜博会員

分科会

- | | |
|---------------|----------------------------------|
| 分科会 1 (大講義室) | カミキリ分科会 (世話人 : 山迫淳介) |
| 分科会 2 (21 教室) | ゾウムシ分科会 (世話人 : 的場 績) |
| 分科会 3 (22 教室) | ハネカクシ分科会 (世話人 : 野村周平) |
| 分科会 4 (23 教室) | ゴミムシ分科会 (世話人 : 伊藤昇, 森田誠司, 佐藤陽路樹) |
| 分科会 5 (31 教室) | 水生甲虫分科会 (世話人 : 林成多) |
| 分科会 6 (32 教室) | 甲虫以外の小集会 (世話人 : 吉富博之) |

分科会について

会場にはパソコンを用意いたしません。講演者もしくは世話人が用意するようにしてください。備え付けのプロジェクター (VGA 端子・HDMI 端子) をご利用ください。

第2日目 12月3日(日)

シンポジウム

「日本の昆虫分類学のこれまでと今後」

大原昌宏(北海道大学総合博物館):エンマムシ分類学と博物館

小西和彦(愛媛大学ミュージアム・愛媛大学農学部):寄生蜂の分類学の行方

広渡俊哉(九州大学大学院農学研究院昆虫学教室):九州大学の昆虫分類学と昆虫コレクション

司会進行:吉富博之

一般講演(口頭発表)

口頭発表1

31教室 12/3 10:30~12:00

- 10:30 01-1 野村周平:コガネムシ科ヒゲブトハナムグリ亜科およびセンチコガネ科(コウチュウ目)成虫大あご微細構造のSEM観察
- 10:45 01-2 長谷川杏乃, 小西和彦(愛媛大学・農学部):日本産ミズバチ属(ハチ目ヒメバチ科)の分類学的研究
- 11:00 01-3 中村涼, 久保田耕平(東大院・森林動物):シリプトジョウカイ属 *Yukikoa* の分類学的研究と課題
- 11:15 01-4 木本大貴(愛媛大学):愛媛県のサツマゴキブリの分布
- 11:30 01-5 荻部治紀(神奈川県立生命の星・地球博物館)・北野 忠(東海大学):南西諸島の止水性水生昆虫の衰亡 —とくにミズスマシ, コガシラミズムシ, 小型ゲンゴロウ類の動向—
- 11:45 01-6 末長晴輝(大阪市立自然史博物館外来研究員), 篠原 忠(静岡大学理学部生物科学科), Lee Chi-Feng (Taiwan Agricultural Institute):日本と台湾におけるセモンジンガサハムシ種群(ハムシ科カメノコハムシ亜科)の分子系統解析

口頭発表2

32教室 12/3 10:30~12:00

- 10:30 02-1 千田喜博(庄原市立比和自然科学博物館), Thai-Hong Pham, Trung Thanh Vu, Hoai Thu Thi Nguyen (Vietnam National Museum of Nature), Hong Minh Bui (Department of Biology, Hanoi National University of Education):*Paratolmerus* 属(ハネカクシ科:ハネカクシ亜科:ヒゲオレハネカクシ族)のベトナムにおける発見
- 10:45 02-2 魚住暢:日本産 *Bathyplectes* 属(ヒメバチ科, チビアメバチ亜科)の分類学的再検討
- 11:00 02-3 橋爪拓斗(九大院・生資環・昆虫):*Euryusa* 属 *Ectolabrus* 亜属(甲虫目:ハネカクシ科)について
- 11:15 02-4 藤元遙哉(愛媛大学):バイオリンムシ属 *Mormolyce* (コウチュウ目:オサムシ科)の内袋の検討
- 11:30 02-5 田作勇人(東海大学生物学部生物学科), 竹中万紀子(東海大学生物学部生物学科), 松井晋(東海大生物学部生物学科), 井上修吾(九州大学農学部昆虫学教室), 丸山宗利(九州大学総合研究博物館):シジュウカラとコムクドリの巣から得られたヒゲブトハネカクシ亜科(ハネカクシ科)の数種について
- 11:45 02-6 蓑島悠介(北九州市立自然史・歴史博物館):日本産ツヤヒラタガムシ亜科の分類体系と幼虫形態(鞘翅目・ガムシ科)

口頭発表3

31教室 12/3 14:45~15:45

- 14:45 03-1 浅野悟史(京都大学大学院地球環境学堂), 時任美乃理(京都大学大学院農学研究科), 西前出(京都大学大学院地球環境学堂):瀬戸内海地域のフタオビミドリトラカミキリの分布と地理条件 —愛媛県西条市加茂川流域周辺を事例に
- 15:00 03-2 中田勝之(石川県白山自然保護センター):石川県のブナ林と照葉樹林において衝突板トラップ(FIT)によって採集されたアリヅカムシ相の比較
- 15:15 03-3 林 成多(ホシザキグリーン財団), 上手雄貴(名古屋市衛生研究所), 小川直記(東京農業大):日本産ナガアシドロムシ属 *Grouvellinus* の再検討(コウチュウ目ヒメドロムシ科)
- 15:30 03-4 中村剛之(弘前大・白神センター):ミスジシリアゲ *Panorpa trizonata* (長翅目・シ

リアゲムシ科) の分類学的再検討

口頭発表 4

- 32 教室 12/3 14:45~15:45
- 14:45 04-1 大松勇司・小西和彦: 日本の *Tlathara* 属(ヒメバチ科キバラアメバチ亜科)の分類学的研究
- 15:00 04-2 赤石孝太郎(九大院・地社), 荒谷邦雄(九大院・比文): コクワガタ名義タイプ亜種 *Dorcus rectus rectus* を用いた幼虫における発音の機能解明
- 15:15 04-3 菅谷和希(株式会社環境指標生物), 柿添翔太郎(国立科学博物館), 大岡素平(株式会社南都), 田村常雄(特定非営利活動法人東洋蝙蝠研究所), 曾根信三郎(日本植物防疫協会): メクラチビゴミムシ(オサムシ科:チビゴミムシ亜科:チビゴミムシ族)の琉球列島からの発見
- 15:30 04-4 井上修吾: 日本産 *Phloeophagosoma* 属および近似属(ゾウムシ科:キクイゾウムシ亜科)の再検討と属分類の問題点

一般講演(口頭発表)をされる方へ

一般講演の持ち時間は質疑応答も含めて一題あたり15分です。講演時間は厳守してください。講演には液晶プロジェクターが使用できます。

会場にはWindows10®およびMicrosoft PowerPoint®がインストールされたパソコンを用意いたしますが、ご自身のパソコンを使用しても構いません。備え付けのプロジェクター(VGA端子・HDMI端子)をご利用ください。事前に動作確認をお願いいたします。会場のパソコンを利用する場合は、ご自身の講演のすくなくとも1つ前までに、会場のパソコンにファイルを入れるようにしてください。なお、発表終了者に次の講演の座長をお願いいたします。

一般講演(ポスター発表)

- P-1 塩崎由依(愛媛県立西条高等学校), 高橋奈々(愛媛県立西条高等学校), 東睦雄(愛媛県立西条高等学校), 浅野悟史(京都大学大学院地球環境学堂地域資源計画論研究室): 西条市千町地区における里山生態系と訪花性カミキリムシとの関係
- P-2 伴 光哲(帯広畜産大, 千葉中央博), 武智礼央(NPO法人森からつづく道): 日本初記録属となる *Kanigara* 属(カメムシ目:ナガカメムシ上科:ヒョウタンナガカメムシ科)について

一般講演(ポスター発表)をされる方へ

大会1日目の午前中から掲示可能です。発表者自身による掲示をお願いします。画鋲は用意します。ポスター発表コアタイム時(2日目9:00~)にはできるだけ会場での説明をお願いします。撤収は2日目の午後をお願いします。

講演要旨

シンポジウム

エンマムシ分類学と博物館

大原昌宏（北海道大学総合博物館）

大学を退職するまで、あと残すところ3年となりました。まだすこし早いのですが、この機会に、これまで私が行ってきた研究と博物館での活動を振り返らせていただければと思います。研究面では、鹿児島大学の学部から、北海道大学大学院農学研究科、小樽市博物館、北大農学部、総合博物館と、約40年にわたり、エンマムシ上科の記載分類を行ってきました。研究をはじめた1980年代から現在までのエンマムシ研究の変遷を辿らせていただければと思います。この分類研究は、私の博物館での活動と深く関わります。地域ファウナ研究、海浜性甲虫研究、バイオメテックス応用研究、昆虫学・博物館学アウトリーチ、昆虫収蔵庫・データベースの維持管理といった博物館での活動もご紹介します。また大学博物館運営、学会運営、学会誌編集、地域自然・文化財保護といったアドミン業務もかなりの時間を割いた業務です。博物館や大学で分類研究を行ってきたものの経験談をお示しできれば幸いです。

寄生蜂の分類学の行方

小西和彦（愛媛大学ミュージアム・愛媛大学農学部）

演者は大学院生時代から一貫して寄生蜂の分類学的研究を行ってきた。

寄生蜂の中でも、ヒメバチ科アメバチモドキ属について長く研究しており、日本産の種の再整理を行った後はベトナム産の種について研究している。この属は現在、世界で約320種が知られており、12の亜属に分けられている。種の識別に雄交尾器形態が決め手となる点が、ハチ目の中では際立った特徴である。研究開始時は日本から6亜属24種が記録されていたが、最終的には8亜属68種を認めた。本属の亜属はその単系統性が疑われていたため、日本産及び東南アジアに産する10亜属67種について、53形態形質を用いてTNTで系統解析を行った。その結果、ほとんどの亜属は単系統群となったが、1亜属だけ明らかに多系統群であることが分かった。この結果は今年（2023年）開催された第10回国際膜翅目学会大会で発表した。本大会では形態形質を用いた系統解析は演者の発表の一つであり、他の系統に関する発表はすべてゲノムを用いたものであった。9年前に開催された第8回大会では多数の形態形質を用いた系統解析に関する発表が多くあったことから、この間に大きな変化があったことが分かる。

九州大学の昆虫分類学と昆虫コレクション

広渡俊哉（九州大学大学院農学研究院昆虫学教室）

九州大学では昆虫分類学を中心として研究教育を行って来たが、その中心となる農学部昆虫学教室は2021年に開設百周年を迎えた。この間、100年を越える歴史の中で3,000種以上のタイプ標本を含む400万点におよぶ昆虫標本が蓄積されている。このコレクションには、歴代の教員や学生が収集したものの他に、著名な昆虫学者によって集められた杉谷コレクション（朝鮮半島北部産を含むチョウ目）や立川コレクション（天敵寄生蜂類）に代表されるように、学外から寄贈された貴重なものも含まれている。地域別にみると、ミクロネシア（江崎悌三・安松京三）、パプア・ニューギニア（平嶋義宏）、韓国（森本桂）、インドネシア（湯川淳一）、中央アジア（多田内修）など、歴代の教授による海外学術調査プロジェクトの実施により、アジア太平洋地域の昆虫コレクションが充実している。また、1936年に開設された彦山生物学実験施設の他に、比較社会文化研究院、九州大学総合研究博物館、熱帯農学研究センターなどで昆虫標本を所蔵管理している。

本講演では、2018年4月に設立された九州大学農学研究院附属の「昆虫科学・新産業創生研究センター」を含め、九州大学の昆虫分類学と昆虫コレクションの現状について紹介する。



タイプ標本



収蔵展示室

分科会

カミキリ分科会 分科会 1 (大講義室)

<演題 1>

ハナカミキリ亜科の訪花性進化について

山迫淳介 (農研機構・植防研), 加藤俊英 (船橋市), 大林延夫 (三浦市)

ハナカミキリ亜科は, カミキリムシの仲間の中でも唯一亜科レベルで訪花性を示す大群で, その特徴的な細長い頭部や体型は花粉食に特殊化した形態であると考えられている. その一方で, 亜科内には訪花しない, もしくは稀にしか訪花しないと考えられているグループも知られており, これらの訪花しないハナカミキリは系統的に古いとみなされてきた. しかし, 分子系統情報, 化石情報, 及び各種の訪花に関する情報を用いて, ハナカミキリ亜科の系統関係と訪花性の進化の推定を試みた結果, ハナカミキリの系統と訪花性は必ずしも一致しないことが示された. 本講演では, 暫定的ではあるものの, 明らかとなったハナカミキリ亜科の系統関係を紹介するとともに, その訪花性の進化について議論したい.

<演題 2>

ハナカミキリと酵母の共生関係の多様性

土岐和多瑠 (名古屋大), 岸上真子 (名古屋大), 門司早紀 (名古屋大)

ハナカミキリ (カミキリムシ科ハナカミキリ亜科) の幼虫のほとんどは, 枯死した樹木の材や樹皮を食べる. 木質の大部分はセルロースなどの難分解性成分で構成されており, ほとんどの昆虫が自力で消化できない. ハナカミキリは酵母と共生し, 共生酵母の助けを借りて木質中の難分解性成分を消化すると考えられている. 我々は, 日本産ハナカミキリを対象にハナカミキリと共生酵母の対応関係について網羅的に調べてきた. 本講演では, (1) ハナカミキリの食性と酵母の関係, (2) 本共生系の地理的変異について紹介し, 共生関係の維持メカニズムについて議論したい.

ゾウムシ分科会 分科会 2 (21 教室)

ゾウムシの最近の話題について, 参加者による講演を行います.

ハネカクシ分科会 分科会 3 (22 教室)

<演題 1>

最近発見した日本未記録のゴミハネカクシ族 3 属 (ハネカクシ科ヒゲブトハネカクシ亜科)

○野崎翼 (九大院・生資環・昆虫), 橋爪拓斗 (九大院・生資環・昆虫)

ヒゲブトハネカクシ亜科 Aleocharinae は日本産甲虫目のなかでも分類学的課題が多く残されている分類群の一つである. とりわけ属の数が大きく変動し続けていることが他の分類群と比べて特徴的であり, 直近の 10 年間で 10 属以上が新たに日本から記録されている. 本亜科に属するゴミハネカクシ族 Oxypodini は, 日本においては 13 属 37 種を含む比較的小規模な分類群で, 10 年以内に新たに記録されたのもわずか 1 属のみである. しかしながら, 演者らはここ 1, 2 年の野外調査や標本調査により, 本族の日本未記録属を 3 属見出すことができた. ヒゲブトハネカクシ亜科では, 互いに遠縁である属同士でも外見が酷似している例が数多く存在し, それらが標本の整理や属の同定を困難にしている要因の一つになっていると考えられる. 今回見出したゴミハネカクシ族の 3 属も例外ではなく, 他族に見間違いやすい属が存在する. 本発表ではこれらの簡便な識別方法, 採集方法等を紹介する.

<演題 2>

ミャンマー産アリヅカムシ相 (コウチュウ目, ハネカクシ科) の解明—中間報告

○野村周平 (国立科学博物館),

Mu Mu Aung (Forest Research Institute, Yezin, Myanmar)

演者らは, 2016 年から, ミャンマー産アリヅカムシ相の解明に注力している. ミャンマーからはこれまでに 121 種の記録がある (Nomura & Aung, 2020a). 第 1 演者野村は 2017 年, 2018 年, 2020 年の 3 回, ミャンマー南部のタニンタリー地域を調査し, 93 種のアリヅカムシを記録した (Nomura & Aung, 2021a). 一方で, 南部以外の解明は十分ではなく, 唯一中部のネビドー地区イエジン (FRI 構内) においてライトトラップ調査を行い, 10 種を記録している (Nomura & Aung, 2021c). 本年 6~7 月, 野村は中部のシャン州タウンジーおよびカローの周辺にて採集調

査を行い、合計 30 種ほどのアリヅカムシを採集した。また、イエジンの FRI 構内で、2020 年とほぼ同じ地点において同規模のライトトラップ調査を行い、今回は 22 種 174 個体のアリヅカムシを得た。2020 年 2 月と今回 7 月の共通種は 7 種であった。夏季と冬季でアリヅカムシ相が季節的に大きく変化しているとすれば大変興味深い。

本研究に関連して第一演者野村は、日本学術振興会 科学研究費補助金基盤(B) (課題番号: 21H02212; 代表者: 井手竜也) の助成を受けている。

ゴミムシ分科会 分科会 4 (23 教室)

<演題 1>

南西諸島産ゴミムシ目録の作成から見えてきたこと、および近年の南西諸島産ゴミムシの野外調査状況について

中村涼 (東大院・森林動物)

オサムシ科 (ハンミョウ科除く) は、日本から約 1700 種が知られており、北方系・南方系など様々な分布パターンの種が存在する。演者は近年、南西諸島産のオサムシ科 (ゴミムシ) に注目し、文献目録の作成や、野外調査・標本調査を行ってきた。文献調査では、南西諸島から約 340 種の本科の記録を見出すことができ、各種の分布パターンや、近年記録のない種の存在などが明らかになった。また、野外調査・標本調査により、未同定種・日本未記録種の発見や、稀種の生態的知見、南西諸島でのゴミムシの生息環境の経年変化など、新たな知見を得ることができた。本発表では、これらの情報を紹介する。

<演題 2>

屋久島の高標高域に棲息するオサムシ科甲虫について：生態的知見と未記載種に関する報告

内田脩太 (NPO 行徳自然ほごくらぶ)

演者は 2023 年の 9 月に屋久島の高標高域においてオサムシ科甲虫を対象とした採集調査を行った。主に淀川登山口 (標高 1,370 m) ~ 宮之浦岳 (標高 1,936 m) の一般登山道上にて、夜間の見つけ採りによって未記載種 1 種を含む 11 種を採集および観察した。本発表ではそれぞれの種についての食性や垂直分布、マイクロハビタットなどの生態的知見について報告する。また未記載種はヒラタゴミムシ族の *Atranodes* 属の一種と考えられ、現在まで判明していることを報告する。

なお調査に際しては、屋久島国立公園特別保護地区における動物の捕獲及び殺傷の許可 (令和 5 年 4 月 12 日付環九屋自許第 2304121 号)、特別天然記念物屋久島スギ原始林における現状変更の許可 (令和 5 年 7 月 21 日付 5 文庁第 1892 号)、屋久島国有林野における入林許可 (令和 5 年 7 月 21 日付) をそれぞれ得て実施した。

水生甲虫分科会 分科会 5 (31 教室)

<演題 1>

島根県産水生甲虫の DNA バーコード：現状と課題

林 成多 (ホシザキグリーン財団)

DNA バーコードは、同定が確実な (または再検討可能な) 動物標本の COI 遺伝子の前半領域の配列をデータベースに登録し、配列から未同定サンプルの判別を行う手法である。甲虫の研究では、メス個体や幼虫の同定に用いることができるほか、様々な応用が可能になる。しかしながら、“バーコード”として利用するには、種内変異も含めた配列情報が網羅的に登録されていることが前提である。日本産の水生甲虫類については、現在利用できる網羅的なデータセットは無いため、構築するところから始める必要がある。演者は協力者と共に島根県産の水生甲虫の登録をしており、登録状況や課題などについて紹介したい。

<演題 2>

本州から発見されたキタキイロネクイハムシの生態に関する知見と系統的位置

○小川直記 (東京農業大)、中濱直之 (兵庫県立大・ひとはく)、
岡野良祐 (守口市)、西本雄一郎 (松阪市)、
中谷祐輔 (名古屋市)、野一色麻人 (NACS-J)

キイロネクイハムシ属 *Macropilea* は日本に 2 種が分布するが、キイロネクイハムシ *M. japona* は 1962 年以来採集されておらず、もう一種のキタキイロネクイハムシ *M. mutica* も 2006 年に北海道・釧路湿原の達古武沼から記録されたメス 1 個体のみが知られているのみで、幻の属となっていた。筆者らの一部も折に触れて探索を行って

たが見つけれないでいたところ、2022年にキイロネクイハムシ再発見の報に接し、さらなる新産地を発見すべく各地に赴くようになった。そんな中、東北地方での探索活動中にキイロネクイハムシ類の成虫が入った繭を発見。形態と分子の双方から検討した結果、これまでに本州から知られていなかったキタキイロネクイハムシと同定された。本講演では、採集時の様子や、その後の追加探索や生体観察で判明した生態の一部、分子解析による系統的な位置など、キタキイロネクイハムシについてこれまでわかっていることをとりまとめ、報告したい。

甲虫以外の小集会 分科会 6 (32 教室)

甲虫類以外の話題につきまして、参加者による講演を行う予定です。
なお、冒頭に日本昆虫分類学会の総会を行います（会員外の参加可）。

口頭発表

01-1 コガネムシ科ヒゲトハナムグリ亜科およびセンチコガネ科（コウチュウ目）成虫大あご微細構造のSEM観察

野村周平（国立科学博物館）

今回演者は、昨年報告した食糞群の補充の意味で、食性が他の食糞群と異なるコガネムシ科ヒゲトハナムグリ亜科の4種、およびセンチコガネ科の外国産2種についてSEM観察を行った結果を報告する。ヒゲトハナムグリ亜科では、食糞群の他の亜科とは異なり、臼歯部の表面は、トラハナムグリ亜科（食葉群）などと同様のおろし金状であることが分かった。しかし4種はともに臼歯部が背腹方向に細長く、この点では食糞群の特徴を有している。また、観察した2属のうち *Amphicoma* 属では、他の食糞群と同様に大あごの腹面基部に結合部（conjunctivus）をそなえていた。また、タイ産ツノセンチコガネ *Enoplotrupes sharpi* ならびにウクライナ産オオキバセンチコガネ *Lethrus apterus* についても成虫大あごのSEM観察を行った。ツノセンチコガネの大あごは日本のセンチコガネと基本的な構造においてすべて一致していた。オオキバセンチコガネの一種では大あご内縁の内歯および臼歯部は肋骨状にひだが走る独特の構造であった。また、ツノセンチコガネでは他の食糞群のコガネムシ科と同じ位置に同様の構造の結合部をもつが、オオキバセンチコガネの一種では結合部を欠いていた。

本研究に関連して第一演者野村は、日本学術振興会 科学研究費補助金基盤(B)（課題番号：21H02212；代表者：井手竜也）の助成を受けている。

01-2 日本産ミズバチ属（ハチ目ヒメバチ科）の分類学的研究

長谷川杏乃，小西和彦（愛媛大学・農学部）

ミズバチ属は、ヒメバチ科ミズバチ亜科の唯一の属である。メス成虫がトビケラ類の前蛹や蛹の入っている巣を水中に潜って探す特異的な生態を持ち、単寄生性で外部殺傷寄生を行う。旧北区と東洋区から21種が知られ、日本からは2種が記録されている。しかし、「日本産水生昆虫」川合・谷田編（2005）内で、既知種2種とは異なる寄主である、フタスジキソトビケラ寄生のミズバチの存在を指摘しており、第3の種がいると考えられてきた。

本研究では実態を明らかにするため、フタスジキソトビケラ寄生の標本と新たに得られた標本をもとに交尾器を含めた形態的特徴を比較し分類学的研究を行った。その結果、3種の未記載種が確認されたので、これについて報告する。

01-3 シリプトジョウカイ属 *Yukikoa* の分類学的研究と課題

中村涼，久保田耕平（東大院・森林動物）

シリプトジョウカイ属 *Yukikoa* Satô, 1976（ジョウカイボン亜科ジョウカイボン族）は、赤褐色の背面、小さな複眼、後方に向かって広がる上翅、雌の巨大な腹部などの顕著な形態的特徴を有する一属で、これまでに日本の本州のみから9種が知られている（Takahashi, 2003; Okushima & Takahashi, 2010）。演者は最近、これまで本属が知られていなかった地域からの標本を検討する機会を得て、2新種を記載し（Nakamura & Kubota, 2023）、さらにそれら以外にも複数の未記載種の存在を認識した。本発表では、これらの種の特徴について報告するとともに、これまでの本属の分類を見直した結果を報告する。さらに、本属は野外で採集されることが極めて稀であり、それゆえに研究材料が不足している現状があることから、これまでにわかっている本属の採集状況に関する知見をまとめ、本属の効率的なサンプリング方法についても検討する。



01-4 愛媛県のサツマゴキブリの分布

木本大貴 (愛媛大学)

サツマゴキブリ *Opisthoplatia orientalis* は、オオゴキブリ科サツマゴキブリ属のゴキブリで、日本、台湾、中国、インドネシア、インドに分布する(朝比奈, 1991)。

これまでの愛媛県における記録は南部の愛南町西海町のみであるが、今後調査すれば新たな分布地が見つかると思われる(濱田・酒井, 2001)。今回、愛媛県の110地点を調査したところ新たに14地点で本種が発見され、愛媛県の宇和海沿岸部の市町村、松前町、松山市にまで分布が拡大していることを確認した。本講演では本研究の概要について発表する。

01-5 南西諸島の止水性水生昆虫の衰亡 —とくにミズスマシ、コガシラミズムシ、小型ゲンゴロウ類の動向—

荏部治紀 (神奈川県立生命の星・地球博物館)・北野 忠 (東海大学)

演者らは、1990年代から南西諸島の水生昆虫の調査を続けてきたが、2010年代から顕著な減少や地域絶滅が観察されるようになった。その後も状況は悪化の一途をたどり、危機的な種が多く存在する。絶滅危惧種の中でも、大型ゲンゴロウ類は早い時期から注目され、演者らを中心として域内・域外での実践的な対策もとられてきた。

今回は、近年筆者らが集中的に調査をしてきた水生甲虫のミズスマシ類とコガシラミズムシ類を中心にその危機的状況について紹介する。

南西諸島の止水性ミズスマシ類は、オオ、ツマキレオオ、リュウキュウヒメの3種が知られ、このうちリュウキュウヒメはもともと局限されていた。前2種は普通に見られたが2010年代から各島で急激に減少し、現存産地は各種ともわずかな島のみで、いずれの種も残存産地はごく少ない。コガシラミズムシ類は、本年再検討が行われ、分類面で整理がなされた。南西諸島からは、シナ、タイワン(湧水)、コウトウ、ウスチャ、キイロが記録されているが、シナが比較的広く残存している以外は危機的でキイロは1か所、タイワンは1-2か所、ウスチャも我々の知る限り数か所、コウトウに至ってはこの10年以上確認できておらず、国内絶滅が心配される状況にある。

ゲンゴロウ類の中では、内地も同様だが、ケンゲンゴロウ類、ツブゲンゴロウ類がとくに減少しているのので、あわせて報告する。過去には「普通種」だった種も絶滅が心配される現況は極めて深刻と言える。

01-6 日本と台湾におけるセモンジンガサハムシ種群 (ハムシ科カメノコハムシ亜科) の分子系統解析

末長晴輝 (大阪市立自然史博物館外来研究員)、篠原 忠 (静岡大学理学部生物科学科)、
Lee Chi-Feng (Taiwan Agricultural Institute)

セモンジンガサハムシ種群は旧北区東部から東南アジアにかけて分布し、*Cassida versicolor* (Boheman, 1855) など複数種からなる種群である。これまで、日本全土にセモンジンガサハムシ *C. versicolor* が分布し、台湾には *C. crucifera* (Kraatz, 1879) が分布すると考えられてきた。日本本土および台湾の個体群は、上翅の後縁部に斑紋があるものから欠くものまで変異がみられる。一方で、琉球列島の個体群は上翅の色が明るく、上翅後縁部の斑紋を欠く。本種群は Medvedev & Eroshkina (1988) などにより同一種内に雄交尾器形態の異なる複数の種が混在している可能性が指摘されており、日本や台湾においても複数種が混在している可能性が考えられている。そこで本研究では、日本および台湾の個体群についてミトコンドリアのCOI領域に基づく系統解析を行った。その結果、日本本土-台湾北部、琉球列島、台湾中南部の個体群からそれぞれ構成される3つのクレードが認められた。日本本土の個体群と琉球列島の個体群の遺伝距離は4.9%~5.6%であった。台湾においては、北部の個体群と中南部の個体群の遺伝距離が約6%であった。形態の比較検討も行ったところ、これら3つの単系統群は、それぞれが雄交尾器内骨片の形状などによって区別できることが判明した。これにより、日本本土と台湾北部の個体群は *C. crucifera* と同定され、琉球列島の個体群と台湾中南部の個体群はそれぞれ未記載種であると考えられた。

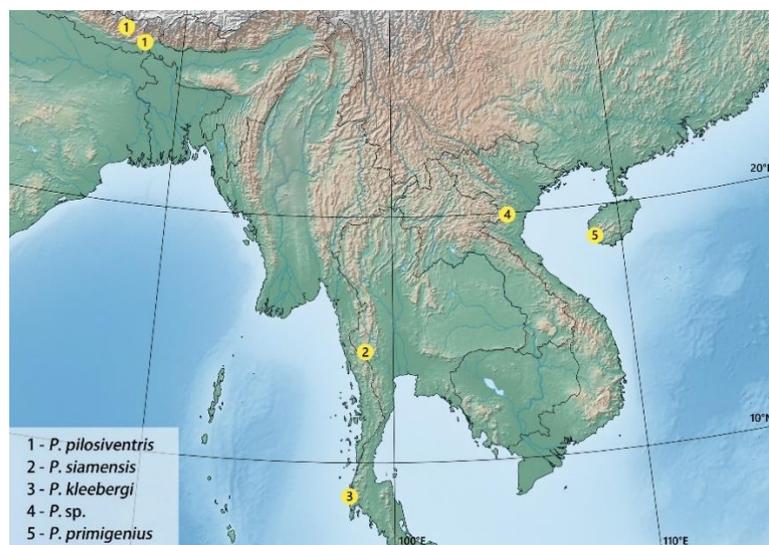
02-1 *Paratolmerus* 属 (ハネカクシ科: ハネカクシ亜科: ヒゲオレハネカクシ族) のベトナムにおける発見

○千田喜博 (庄原市立比和自然科学博物館)、Thai-Hong Pham, Trung Thanh Vu,
Hoai Thu Thi Nguyen (Vietnam National Museum of Nature),
Hong Minh Bui (Department of Biology, Hanoi National University of Education)

Paratolmerus 属はこれまでにヒマラヤ東部・タイ南部・海南島から、点々と4種が知られているのみの小さな属である。本属は日本にも数種が分布しているヒゲオレハネカクシ属 *Acylophorus* によく似ているが、中央部を除き頭部に点刻と毛を散布すること、中後脚第4節に極めて長い毛を1対有することなどで区別できる。生態もヒゲオレハネカクシ属とよく似ており、小川や溪流の岸辺などに堆積した、非常に湿った落葉から発見されることが多い

という。一方、本属は「激珍 (extremely rare)」とされ、これまでに得られているのは7個体のみだという。

演者は2023年5月にベトナム中北部の Xuân Liên Nature Reserve を訪れ、昆虫類の調査を行ったところ、得られたハネカクシの中に本属の種が含まれていた。本講演では、今回発見された種について詳細な検討を行った結果を報告する。



02-2 日本産 *Bathyplectes* 属 (ヒメバチ科, チビアメバチ亜科) の分類学的再検討

魚住 暢 (愛媛大・農)

トビチビアメバチ属 *Bathyplectes* はヒメバチ科, チビアメバチ亜科に含まれる属で世界に30種が知られている。我が国においては, *B. anurus*, *B. curculionis* の2種が知られており, 2種とも導入種である。マメ科牧草を食害する侵入害虫のアルファルファタコゾウムシを寄主とするため天敵昆虫として米国から導入された経緯があり, *B. anurus* は採蜜用レンゲを食害するアルファルファタコゾウムシを防除する目的で生物農薬として利用されている。

日本で知られている本属の種の寄主記録はアルファルファタコゾウムシのみであるのに対し, 愛媛大学ミュージアムが所蔵する本属の標本の中に, 寄主がハコベタコゾウムシである個体とオオタコゾウムシである個体がいた。本研究では大学が保有するこれらの標本を用いて形態的特徴を比較し, 分類学的研究を行った。その結果, 1種が未記載種, 1種が日本初記録の種であることが確認されたため, そのことについて報告する。

02-3 *Euryusa* 属 *Ectolabrus* 亜属 (甲虫目: ハネカクシ科) について

橋爪拓斗 (九大院・生資環・昆虫)

アシボソシリアゲハネカクシ属 *Euryusa* Erichson, 1837 はハネカクシ科ヒゲトハネカクシ亜科に属し, 世界に13種, 日本からは3種が知られる。本属には2亜属が知られ, 日本産の3種を含む5種が *Ectolabrus* 亜属に属している。基亜属は主にヨーロッパに分布し, 好蟻性であることが知られる。しかしながら, *Ectolabrus* 亜属のタイプ種であるアシボソシリアゲハネカクシ *Eu. (Ec.) pipitzi* (Eppelsheim, 1887) (= *Ec. laticollis* Sharp, 1888) は基亜属の種とは生態も形態も異なり, 同属にしておくのが適切とは考えにくい。さらに, ケシアシボソシリアゲハネカクシ *Eu. (Ec.) hagai* Maruyama & Miyake, 2003 は *Ectolabrus* 亜属の他種とは口器や交尾器が異なり, 未記載の別属の種として扱うのが妥当である。ケシアシボソシリアゲハネカクシと同属と思われる種は台湾とマダガスカルからも見出された。

02-4 バイオリンムシ属 *Mormolyce* (コウチュウ目: オサムシ科) の内袋の検討

藤元遙哉 (愛媛大学)

バイオリンムシ属 *Mormolyce* (コウチュウ目オサムシ科) は, 亜族 *Pericalina* に含まれる属で, タイ, マレー半島, スマトラ, ジャワ, ボルネオに分布し, 6種2亜種が知られている。生態については不明な点が多いが, サルノコシカケ科の菌類に集まることが分かっている。バイオリンムシ属は, これまでオサムシ科の中でさまざまな位置に置かれており, 系統学的位置がはっきりしていない。また, ボルネオ島に分布する, *M. phyllodes engeli* と *M. phyllodes borneensis* の個体群が同所的に見られることから, これら2亜種の分類は疑わしいと考えられる。

オサムシ科では, 雄交尾器の先端にある膜状の器官, 雄交尾器内袋の形態が分類学的に有用であることが, これ

までの様々な研究で実証されている。これらの研究は、内袋の形態から、外形の形態からは得られない、分類学上
有用な情報を得られることを示している。オサムシ科であるバイオリンムシ属においても、内袋の形態を調べるこ
とは重要であるが、内袋の観察をした研究はこれまでになかった。

このことから、演者は、バイオリンムシ属の雄交尾器内袋の観察・比較を行い、分類形質として有用であるのか
検討した。

02-5 シジウカラとコムクドリの巣から得られたヒゲブトハネカクシ亜科（ハネカクシ科）の数種に ついて

田作勇人、竹中万紀子、松井 晋（東海大生物生物学部生物学科）、
井上修吾（九州大学農学部昆虫学教室）、丸山宗利（九州大学総合研究博物館）

鳥の巣は様々な昆虫の生息場所となっていることが古くから知られている。ハネカクシ科でも様々な種が鳥の巣
から見つかっており、国外では多数の種の鳥の巣を調査して巣内から得られたハネカクシ科の種構成を報告した研
究などがある。一方で、日本国内における鳥の巣のハネカクシ相はほとんど未解明の状態にあるといえる。また、
鳥の巣で見つかる昆虫には、鳥の巣に繁殖を依存する（選好性をもつ）種と他の場所でも繁殖できる種が含まれる
とされ、ハネカクシ科にも両者が含まれると考えられる。このうち、鳥の巣に依存しているとされるものとしては、
ヒゲブトハネカクシ亜科の *Haploglossa* 属などが知られる。しかし、このような分類群の詳細な生活史はほとんど
解明されておらず、鳥の巣に対する選好性も十分に検証されていない。

演者らは、北海道においてコムクドリとシジウカラの巣からヒゲブトハネカクシ亜科に属する数種のハネカク
シを採集した。検討の結果、これらはヒメハネカクシ族 Athetini の一属と、日本から記録のなかったゴミハネカク
シ族 Oxypodini の *Haploglossa* 属および *Hylota* 属の種であることが判明した。また、そのうちの主にシジウカ
ラの巣から得られた *Haploglossa* 属の種について飼育観察を行い、それらが鳥の巣を選好している可能性について
考察した。

02-6 日本産ツヤヒラタガムシ亜科の分類体系と幼虫形態（鞘翅目・ガムシ科）

藁島悠介（北九州市立自然史・歴史博物館）

ツヤヒラタガムシ亜科 Acidocerinae は近年になり分類体系が一新され、世界から 23 属が知られる亜科となった。
構成属のうち半分以上が南米の固有属で、アジア地域からは 5 属が知られる。日本にはツヤヒラタガムシ属
Agraphydrus (6 種)、コクロヒラタガムシ属 *Crepelochares* (2 種)、スジヒラタガムシ属 *Helochares* (4 種)、ク
ロヒラタガムシ属 *Peltochares* (1 種) の 4 属が生息している。日本産種の分類については、大枠では解明されてい
るものの、一部に未記載種など分類学上の問題を抱えた種が含まれている。生活史については、近年の研究により
属レベルで幼虫形態が解明されることとなった。本講演では、ツヤヒラタガムシ亜科の日本産種について、近年の
分類体系の変更を紹介すると共に、分類と幼虫形態について現在判明していることをまとめる。

03-1 瀬戸内海地域のフタオビミドリトラカミキリの分布と地理条件 —愛媛県西条市加茂川流域周辺 を事例に

浅野悟史（京都大学大学院地球環境学堂）、時任美乃理（京都大学大学院農学研究科）、
西前出（京都大学大学院地球環境学堂）

フタオビミドリトラカミキリ *Chlorophorus muscosus* (Bates, 1873) は奥尻島から沖縄島にかけて分布する、小
型のトラカミキリ族の昆虫である。日本海側は沿岸部を中心に連続的に分布するのに対し、太平洋側は房総半島よ
り東側に分布域をもたないこと、さらに内陸部において分布空白地を有することから、幼虫穿孔材の海流による移
動が本種の分布を決定づけてきたと考えられている。また、内陸の生息地に対し、成虫期の「河口から河川に沿っ
て上流側へ分布を拡げる種」であるという仮説が提唱され、これらを統合すると、「幼虫の海流による 1 次拡散（供
給）と成虫の河川の遡上による 2 次拡散（分散）」が本種の分布を説明できるモデルといえよう。しかし、分散後の
「定着」を左右する地理条件については検討がなされてこなかった。

そこで、本報告では海流の影響が極めて乏しい瀬戸内海地域において、分散後の定着に寄与する地理的条件の導
出を目的とする。対象地は愛媛県西条市賀茂川支流谷川流域および分水界を南側に超えた高知県の町である。調
査地点の標高約 70m から約 1,600m と幅広いレンジをもつ。調査方法は 11m のつなぎ竿と直径 70cm 捕虫網を用いた
花摘いである。調査時期は 2021 年 7-8 月、2022 年 8 月、2023 年 7-8 月とし、クマノミズキ、リョウブ、アカメガ
シワ、ノリウツギ、カラスザンショウの開花している個体の位置を調査地点とし、10m 未満の至近距離にあるもの
は複数個体をまとめて一つの調査地点とした。

03-2 石川県のブナ林と照葉樹林において衝突板トラップ (FIT) によって採集されたアリヅカムシ相の比較

中田勝之 (石川県白山自然保護センター)

2022年5～7月にかけて、標高約500m、面積約60haの石川県白山市鴫ケ谷(とがたに)のブナ天然林で、また2023年の同月、ほぼ海岸に隣接する面積約1haの羽咋市柴垣の椎葉円比咩(しいはつぶらひめ)神社(以下、単に神社.)のタブノキ・ヤブツバキ主体の社叢林で、地表設置式FITによるアリヅカムシ類の調査を行った。

その結果、鴫ケ谷からは、石川県新記録のヒロムネトゲアリヅカムシ7個体を含む23種216個体、神社からは、能登地方初記録となるフトエンマアリヅカムシ1個体等を含む20種98個体のアリヅカムシ類が得られ、両地点の共通種は8種であった。

特筆すべき点として、2022年にサハリンから記載され、同年科博の野村博士らにより石川県白山市市ノ瀬から日本初記録として記録されたロフツォーヴァヒメナガアリヅカムシ3個体が今回、鴫ケ谷から確認されたことである。なお、本種の採集環境として、サハリンでは針葉樹の倒木、市ノ瀬は日当たりと風通しのよい林縁部のFIT、鴫ケ谷はブナ林内のFITであり、市ノ瀬と鴫ケ谷は約20kmの距離がある。

03-3 日本産ナガアシドロムシ属 *Grouvellinus* の再検討 (コウチュウ目ヒメドロムシ科)

林 成多 (ホシザキグリーン財団), 上手雄貴 (名古屋市衛生研究所),
小川直記 (東京農業大)

日本からは4種のナガアシドロムシ属の既知種が記録されているほか、学名未決定種が存在が知られている。筆者らは、本属の未定種について幼虫形態を含めて行ったので、その経過を報告する。未定種はいずれも湿岩環境に生息し、本州・四国・九州から知られる大型種と、屋久島・大隅半島に分布する小型種の2種である。前者は赤褐色の脚が特徴で、台湾から知られる *G. hygropetricus* に酷似している。交尾器形態もよく似ているが、体表の構造に違いがみられ、未記載種または *G. hygropetricus* の種内変異と考えている。もう1種は屋久島の湿岩に生息し、マルナガアシドロムシによく似ているが、屋久島・大隅半島産の種は体幅がより広いこと、生息環境が全く異なること、幼虫の形態に明瞭な違いがみられることから、未記載種であるとみられる。幼虫形態については、本属は互いによく似ているため識別が困難であるが、マルナガアシドロムシは、背面のコブ状突起が小さく、他種との区別が可能である。

03-4 ミスジシリアゲ *Panorpa trizonata* (長翅目・シリアゲムシ科) の分類学的再検討

中村剛之 (弘前大・白神センター)

ミスジシリアゲ *Panorpa trizonata* Miyake, 1908 はヤマトシリアゲ種群に分類される中型のシリアゲムシで、翅に3本の黒褐色の帯を有することから、日本産の他種から容易に区別することができる。日本固有種であり、青森県を北限とし、本州と九州に広く分布する。

各地の個体を調査したところ、これまで1つの種と考えられていたミスジシリアゲは、翅の斑紋、雄交尾器の形状によって3種に区別されることが明らかになった。本州に広く分布する従来から知られていたミスジシリアゲ *P. trizonata*, 九州山地に生息する sp. 1 (Kyushu), 奈良県の大台ヶ原周辺に生息する sp. 2 (Nara) である。sp. 1 (Kyushu) は他と隔離された集団を形成しているが、sp. 2 (Nara) は紀伊半島において *P. trizonata* と同所的に分布している。

本講演では、それぞれの種の形態的特徴、分布、および、種名の扱いについて解説を行う。



04-1 日本の *Trathara* 属(ヒメバチ科キバラアメバチ亜科)の分類学的研究

大松勇司・小西和彦

キバラアメバチ亜科は世界から 35 属 847 種、日本から 4 属 18 種が知られるヒメバチ科の一群であり、鱗翅目と鞘翅目の内部飼い殺し寄生者である。この内の 1 属である *Trathala* 属はキバラアメバチ亜科で 4 番目に大きい属であり主にメイガ類、ハマキガ類、シンクイガ類等の隠蔽的環境を好む鱗翅目の幼虫を寄主利用する。彼らは世界から 102 種、旧北区から 3 種、日本からはタンボキバラアメバチ(*Trathala flavoorbitalis*)の 1 種のみが記録されている。

演者らは標本調査によりタンボキバラアメバチに加え 11 種を確認したため紹介する。また、この内の 1 種は鞘翅目寄生の種であった。本属で鞘翅目を寄主利用する種は新北区に生息している *T. granulata* が知られるのみであり、本記録は世界 2 例目となる。

04-2 コクワガタ名義タイプ亜種 *Dorcus rectus rectus* を用いた幼虫における発音の機能解明

赤石孝太郎(九大院・地社)、荒谷邦雄(九大院・比文)

クワガタムシ科の幼虫は、中脚基節及び後脚転節にやすり状の発音器を持ち、腐朽材などの生息環境において音を介した情報伝達を行っていると考えられるが、詳細については検証されていない。そこで本研究では福岡県産コクワガタ名義タイプ亜種(*Dorcus rectus rectus*)の終齢幼虫を用いて発音が個体間距離に与える影響を検証した。実験では無処置幼虫及び、発音形質が位置する脚部を紫外線硬化樹脂で固定した処置幼虫について、それぞれ容器内に単独で投入した場合と、無処置個体と処置個体を組み合わせて 2 頭投入した場合の行動を録画・録音によって 3 時間記録した。その結果、無処置個体の発音頻度は、単独の場合と比べて、相手の処置の有無に関わらず他個体が近隣に存在すると有意に増加することがわかった。また、観察終了時の平均個体間距離は無処置個体同士、無処置個体と処置個体、処置個体同士の組み合わせ順に長くなった。以上の結果から、コクワガタ幼虫の発音は近隣の個体から発せられる移動音に対する警告シグナルであり、互いに発音することで同種を認識している可能性があることが示唆された。発音による同種個体同士の認識によって短い個体間距離が許容されることで腐朽材という限られた資源を効果的に利用しているものと考えられる。

04-3 メクラチビゴミムシ(オサムシ科:チビゴミムシ亜科:チビゴミムシ族)の琉球列島からの発見

菅谷和希(株式会社環境指標生物)、柿添翔太郎(国立科学博物館)、
大岡素平(株式会社南都)、田村常雄(特定非営利活動法人東洋蝙蝠研究所)、
曾根信三郎(日本植物防疫協会)

2021 年 12 月に沖縄本島の縦穴において、長い付属肢を備えた大型のメクラチビゴミムシが発見された。詳細に観察した結果、このメクラチビゴミムシは、日本国内のいずれの種とも関連性が認められず、むしろ中国大陸に分布する「超洞窟性種」と多くの形態的特徴が一致することが判明し、新属新種と結論づけられた。メクラチビゴミムシ類は、オサムシ科チビゴミムシ亜科チビゴミムシ族のうち洞窟適応形態を備えた種を指し、主に洞窟や地下浅層といった地下空間に生息する。日本は、東アジアの中でもメクラチビゴミムシ類の多様性が豊かな地域で、北海道から九州にかけて 30 属 450 種(亜種含む)以上が知られている。一方で、これまで琉球列島からはメクラチビゴミムシ類の存在はまったく知られていなかった。今回の発見により、メクラチビゴミムシをはじめとする洞窟適応形態を備えた甲虫類が、今後、琉球列島の各地から発見されることが期待される。本講演では、このメクラチビゴミムシについてこれまでに得られている分類学的知見のほか、遺伝学的解析結果を説明する。併せて、今後の展望や現地調査における留意点等についてもお知らせしたい。

04-4 日本産 *Phloeophagosoma* 属および近似属(ゾウムシ科:キクイゾウムシ亜科)の再検討と属分類の問題点

井上修吾

Phloeophagosoma 属は、旧北区(東アジア)、東洋区、オセアニア区、エチオピア区に分布し、これまでに 35 種が知られている。本属は Wollaston (1873) の体系で扱われた属でも最も形態的な定義が曖昧なものとして、近似属を含めて属分類の再検討が必要である。また、本属は基亜属と *Amorphorhynchus* 亜属の 2 亜属に分類されるが、*Amorphorhynchus* 亜属は形態が大きく異なることから属への昇格が必要かもしれないと指摘されている。日本からは日本本土から記載された *P. minutum* (属のタイプ種)、*P. curvirostre* および *P. emotoi*、千島列島から記載された *P. exile* と *P. rufirostre* の 5 種が知られている。そのうち *P. curvirostre* のみが *Amorphorhynchus* 亜属で、残りは基亜属に分類されている。しかし、森本(1985)はさらに数種を国内から確認していると報告しており、分類学的な再検討が必要である。

演者は、日本産の *Phloeophagosoma* 属の種分類について再検討をおこなった。また、本属と形態が最も近く、属の境界が曖昧な *Oxydema* 属についても日本産種を再検討するとともに、両属の定義について整理した。

ポスター発表

P-1 西条市千町地区における里山生態系と訪花性カミキリムシとの関係

塩崎由依，高橋奈々，東睦雄（愛媛県立西条高等学校），
浅野悟史（京都大学大学院地球環境学学域資源計画論研究室）

人間による持続的な資源利用によって形成された里山は、現在では人々の暮らしの変化により荒廃しつつある。里山生態系からの生態系サービスは農業生産などに恩恵をもたらし、その代表例である花粉媒介に大きく貢献しているのが 1cm 以上の甲虫であるとされ、その中でも訪花性カミキリムシは種数のうえで多くを占める。しかし、里山生態系における送粉者としての訪花性カミキリムシの研究はあまり進んでいない。私たちの学校がある西条市の千町地区は荒廃しつつある里山生態系であり、ここでのシイタケづくりを通して里山生態系の再生とともに里山活動と訪花性カミキリムシの関係を研究する。

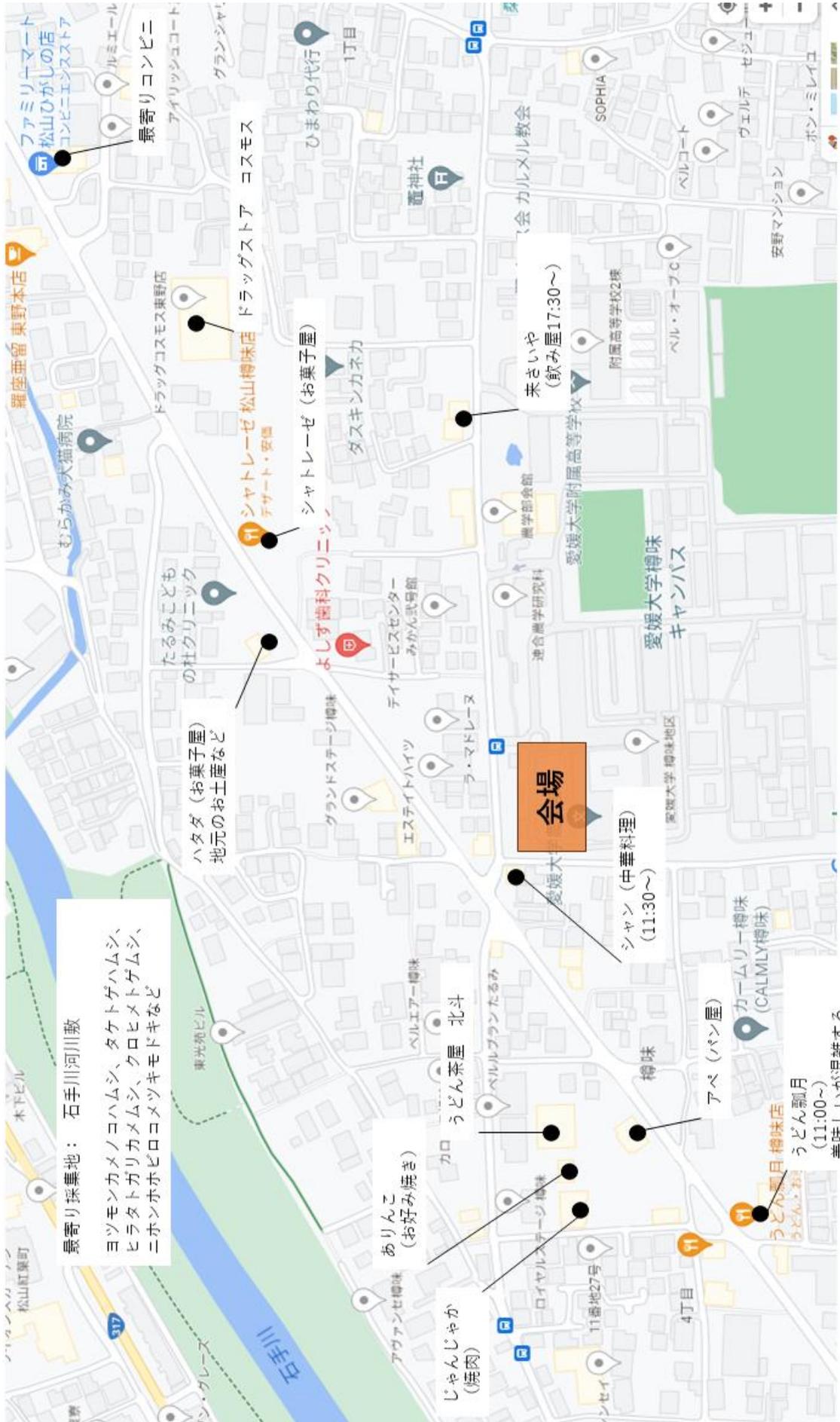
本研究は花を訪れる成虫の調査と、里山活動で生み出される粗朶(そだ)に発生する幼虫の調査の 2 本立てとなっている。これまでの調査では、ツマグロハナカミキリ(ウツギ)やヒメクロトラカミキリ(クリ)、フタオビミドリトラカミキリ(リョウブ)などが観察された。今後はスダジイやアカメガシワの花の時期に調査を行うことで年間を通じた訪花性カミキリムシのリストを作成するとともに、粗朶を利用するカミキリムシの調査を進め、西条市千町地区における里山整備と送粉ネットワークの関係を明らかにしていきたい。

P-2 日本初記録属となる *Kanigara* 属 (カメムシ目：ナガカメムシ上科：ヒョウタンナガカメムシ科) について

伴 光哲（帯広畜産大，千葉中央博），武智礼央（NPO 法人 森からつづく道）

Kanigara 属は、ヒョウタンナガカメムシ科クロナガカメムシ族に属する一群で、東洋区とニューギニアを中心に 10 種が記載されている (Ban, 2022; Dellapé & Henry, 2023)。一方で、さらなる未記載種が複数存在するとされ (伴私信)、幼虫形態や寄主植物については全く解明されていない。国内からはこれまで知られていなかったが、演者らは本属に似た種が愛媛県松山市をはじめ、本州、四国、九州の複数地点から得られていることを見出した。この種の形態形質を検討した結果、①前胸背板は一樣に点刻される ②前胸背板の前葉と後葉の境界の横圧線を欠くなどの特徴から、*Kanigara* 属の一種であると考えられた。一方、①体長は 5.5mm 前後 ②前胸背板の側角に薄い黄色の紋を持つ ③小楯板の Y 字状隆起線の基部には紋を持たない といった特徴が本属の既知種と該当せず、よって本種の正体は「日本初記録属である *Kanigara* 属の未記載種」と結論づけられた。

本発表では、この未記載種の形態的特徴、幼虫形態、寄主植物について報告する。



最寄り採集地: 石手川河川敷

ヨツモンカメノコハムシ、タケトゲハムシ、ヒラタトガリカメムシ、クロヒメトゲムシ、ニホンホホビロコメツキモドキなど

ハタダ (お菓子屋)
地元のお土産など

ありんこ
(お好み焼き)

じゃんじゃか
(焼肉)

うどん茶屋 北斗

会場

シヤン (中華料理)
(11:30~)

アベ (パン屋)

カームリー梅味
(CALMLY梅味)

うどん瓢月
(11:00~)

美味しいが混雑する

「愛ある」愛媛のかんきつ

食べ頃カレンダー



温州みかん

晩生種で、皮が厚く酸味も強いため、かんきつ三冠愛媛の星、夏場の産物であることが特徴です。



はれひめ

晩生種で皮が厚く、早刈り種が特徴。内果皮に食べ頃になる時がわかるような酸味が特徴。



いよかん

晩生種で皮が厚く、口当たりがよいのが特徴。口に含むと皮がやわらかくなるのが特徴。



ボンカン

インド産種で、日本へ伝来。早刈り種が特徴。内果皮に食べ頃になる時がわかるのが特徴。



不知火 (デコボン)

遅熟種で皮が厚く、果皮が赤くなるのが特徴。早刈り種が特徴。内果皮に食べ頃になる時がわかるのが特徴。早刈り種は皮が赤くなるのが特徴。



はるみ

晩生種で皮が厚く、果皮が赤くなるのが特徴。早刈り種が特徴。内果皮に食べ頃になる時がわかるのが特徴。



せとか

晩生種で皮が厚く、果皮が赤くなるのが特徴。早刈り種が特徴。内果皮に食べ頃になる時がわかるのが特徴。



八潮

早刈り種で皮が厚く、果皮が赤くなるのが特徴。早刈り種が特徴。内果皮に食べ頃になる時がわかるのが特徴。



甘夏

早刈り種で皮が厚く、果皮が赤くなるのが特徴。早刈り種が特徴。内果皮に食べ頃になる時がわかるのが特徴。



はるか

早刈り種で皮が厚く、果皮が赤くなるのが特徴。早刈り種が特徴。内果皮に食べ頃になる時がわかるのが特徴。



ブラッドオレンジ

晩生種で皮が厚く、果皮が赤くなるのが特徴。早刈り種が特徴。内果皮に食べ頃になる時がわかるのが特徴。



清見

早刈り種で皮が厚く、果皮が赤くなるのが特徴。早刈り種が特徴。内果皮に食べ頃になる時がわかるのが特徴。



河内晩柑

晩生種で皮が厚く、果皮が赤くなるのが特徴。早刈り種が特徴。内果皮に食べ頃になる時がわかるのが特徴。



カラ (南律海)

早刈り種で皮が厚く、果皮が赤くなるのが特徴。早刈り種が特徴。内果皮に食べ頃になる時がわかるのが特徴。



レモン

早刈り種で皮が厚く、果皮が赤くなるのが特徴。早刈り種が特徴。内果皮に食べ頃になる時がわかるのが特徴。



愛媛の主なオリジナル品種

愛媛県産28号

紅まどんな®

(愛媛県産28号)

皮が薄く、とろけるような食感が特徴。カットフルーツに最適。平成17年3月に品種登録。(愛媛県育成)

※紅まどんな®は全国産地産物検査センターの登録商標です。



甘平

(西之島のボンカン)

シャキッとした食感と濃厚な食味が特徴。品質基準を満たした最高級品を愛媛 Queen's ブランディングとして開発。平成18年8月に品種登録。(愛媛県育成)

※愛媛 Queen's ブランディング®は愛媛県の登録商標です。



愛媛県産48号

紅プリンセス®

(愛媛県産48号)

紅まどんなの食感と甘平の濃い食感を併せ持つ品種。令和元年8月に品種登録。(愛媛県育成)

※紅プリンセス®は愛媛県の登録商標です。



このマークは、愛媛県産のかんきつを指し示すのに使われる登録商標です。また、このマークは、愛媛県産のかんきつを指し示すのに使われる登録商標です。

愛媛のかんきつ21推進協議会



12月は「温州みかん」、「紅まどんな」、「はれひめ」の時期に当たります。

「温州みかん」は松山周辺だと中島産が美味しいとされますが、あまり変わりありません。試食してみて美味しくて安いものを買うのがお勧め。

「紅まどんな」は、高級ですが美味しくお土産にお勧め。スーパーなどで「愛果28号」として安く売られているものは、紅まどんなの地元劣化版で、傷がついたり糖度が足りなかったりするが、時に紅まどんなと同等の美味しいものが混じっている。

「はれひめ」はオレンジと温州みかんの中のような味で、さわやかで美味しい。



日本甲虫学会第 13 回大会
日本昆虫分類学会第 26 回大会

大会長：小西和彦
大会事務

〒790-8566 松山市樽味 3-5-7 愛媛大学農学部昆虫学研究室
TEL:089-946-9898